恩師渡辺澄夫先生を憶う

秦　政　博

「巨星堕つ」という言葉でしかいい表しようのない強い衝撃、そして見るみるひろがっていった虚脱感。――恩師渡辺澄夫先生の訃報を受けた一瞬のことでした。

昭和三十六年、先生の研究室で初めての講義を受けて爾来三十六年、変わることなく学恩をいただき乍ら、その万分の一も報いることのできなかった不肖の教え子であったことに、今は唯、悔貪の念でいっぱいです。歴史に向きあうとき、寝食を忘れるほどの直向な取りくみが不朽の名著『畿内庄園の基礎構造』をはじめとした数々の業績を世に送られ、そして晩年の大著『豊後国荘園公領史料集成』（八巻十二冊）に結実されたことは斯界の皆が首肯するところです。

学恩は言うまでもなく、節目ふしめの人生に指針をいただいたのも誠に幸いでした。教師から県史編纂に参画し、そして現在、文化財行政（大分市）に携わっていることも先生のご支援あってのことに外ありません。既に早く他界した父と同じ明治四十四年生まれの先生に、厳父の思いや慈父の追憶を重ね合わせてきたことも、そのような故あってのことからです。津久見から大分に住所を変えられて以来、偶々数百メートルの所にある拙宅に、ある時はご著作を、ある時は手づくりの野菜などを自転車に乗ってお持ち下さった往時の姿は、瞼にやきついて離れません。

先生の書斎には、時も構わず幾度お邪魔したことだろうか。時に史料を携え、時には憶面もなく拙文を持ち込んで叱正をいただいたこと。臼杵商高勤務の折、臼杵藩に手を染めたのも先生のご指示もあってのこと（未開拓の豊後近世にメスを入れなければ…という思いを屢々語られていたこともあって）。このような、公私にわたる様々な思いが交錯する中、日を置かず慕われるように奥様のあとを追われました先生、ご夫妻の御霊の安からんことをお祈りいたします。

（大分市教育委員会文化振興課参事）